

色、形に対して感性や想像力を働かせることのできる児童の育成

—小学校図画工作における具体物、ワークシートの工夫を通して—

教職実践基礎領域

岩田 一馬

I はじめに

図画工作が好きで、得意とする児童も多くいるのだが、図画工作を苦手と感じている児童も少なくはない。図画工作の苦手な児童に話を聞くと、算数のように一定の手続きにのっとって正解を導き出すことができる教科は取り組みやすいのだが、図画工作のように決まった解はなく、自分なりの表現をしなければならぬ教科は難しいと考えているようだ。

表現することへの不安な思いを取り除くことができれば、児童は図画工作に対して親しみを持ってくれるのではないか。そこで、本実践では、児童が表現活動をするときにイメージしたり、構想したりする力となる「感性」「想像力」をテーマとした。児童が図画工作を楽しみ、さらに豊かな造形表現を目指した授業の研究を行った。

II 主題設定の理由

1 目指す児童像 —学習指導要領からの考察—

小学校学習指導要領図画工作編の目標に「表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す」(1)とある。色、形に対して感性を働かせることのできる能力を身につけることが、今日求められていると読み取ることができる。また、「自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすこと」(1)とあり、自分だけにしかない独創性を持った作品を、想像力を働かせながら作り出すことの大切さについても説かれている。

そこで、私は図画工作での授業を通じて児童が作品の色や形に関して感性や想像力を働かせ、自分ならではの独創的な作品を作れるようになることを目標とした。

2 感性、想像力を働かせることに関して

学習指導要領に感性とは、「様々な対象や事象を心に感じ取る働きである」(1)とある。つまり、対象に対して多くの思いを巡らせることができる力のことである。図画工作に当てはめれば、例えば、犬の絵を描くときそれが優しい犬なのか、強い犬なのか、自分の思いを持たせて描くことがそれに当てはまる。

また、想像という言葉を見ると、阿部の論文の中に「イメージは自らの意思とは別に常に発生する

といってもよい。そのイメージをさらに取捨選択したり、別の要素と組み合わせたりして、全く異なる発想を生み出したり、新たな可能性の鍵となったりする」

(2)とあった。ここから、頭の中に思い描いたイメージを児童がどう発展させるかが想像力を育むうえでとても大切である。作品を作るうえで必要な要素を取捨選択することで作品は精選され、別の要素と組み合わせることで作品の独自性が増すだろう。自分にしかない新たな発想を生み出すために、児童が想像力を働かせ、イメージした要素と試行錯誤しながらかかわることが大切だと感じた。

3 先行研究における図画工作と想像力のかかわりについて

色部は論文「想像力と創造力」を豊かにする図画工作の授業についての考察：絵本作作を通して」のなかで想像力について以下のように述べている。「人は表現活動をするときに、「想像力」を働かせてイメージしたり構想したりし、「創造力」を働かせてそれを形にする」(3)イメージを膨らませる「想像力」と、それを形にする「創造力」。この2つの「そうぞう力」の調和が楽しい造形活動の源になる。色部氏は学生との一年を通じた造形活動の中で「(学生の)想像がどんどん膨らんでいく様子を読み取れる。さらに、想像力を働かせてストーリーを展開し、それぞれの場面に応じて技法を選択している。技法の扱いも緻密な作業で効果的である」(3)と手ごたえを感じている。描画、粘土、工作、版画やモダンテクニックを演習しながら最終的に絵本作りに取り組む。図工が苦手であるという学生が描いたり、作ったりするうちに図工が楽しくなってきたと感想を持つ。「図画工作とは、楽しさを軸に感性や想像する力を羽ばたかせ、材料や用具とかかわりながら、もてる資質・能力を十分発揮して「思い」を形や色で創造的に表す造形活動である、といえる」(3)。

感性、想像力を働かせ自分らしく表現するためには、段階を踏んだ指導が必要だと考える。

4 先行研究における図画工作と具体物の活用のかかわりについて

岩倉は論文の中で「何もない真っ白な状態から児童が想像するのではなく、何か材料があることで想像をしやすくし、想像を広げ深めることができる」

(4)と述べている。児童が想像力を働かせ、自分のイメージを持つにあたり、具体物やワークシートを私は材料として提示したいと考えた。

想像を広げる材料としての具体物の提示は、他者や教師の作品に触れることで児童の感性を刺激し、新たな工夫への扉となる。佐藤は、具体物を用いて作品へのイメージを膨らますための方法について「既習の知識・技能を活用したり、仲間の表現や作例にかかわったりして、材料や表現方法の選択肢を増やすように働きかけていくことで、ふくらんだ願いにふさわしい表し方を選択・決定し造形化していく姿が具現できる」(5)と記述している。

感性を刺激し、想像力に広がりを持った作品へと導くためには、作品を形作る「造形的な視点要素」を知ることは欠かせない。「造形的な視点要素」とは、中学校学習指導要領解説美術編には「形や色彩、材料、光などの造形的な要素」(6)と紹介されている。その中で、本研究に使われた要素と活用例を以下に示す。

形…卵の形、切り方、配置、ストローの仕組みに関して思いや意図を持つこと。
色彩…色画用紙の選び方、色数、色の組み合わせ方に関して思いや意図を持つこと。
材料…ジュズダマやドングリなどの自然の材料、モールや毛糸など多様な材料の効果的な組み合わせ方に思いや意図を持つこと。

私は作品を形作っている要素をいかに活用できるか、手立てを講じることも本研究で大切にしたい。

5 研究主題について一色、形に対して感性、想像力、想像力を膨らませる一

私は児童の「構想」「想像力」「創造力」に関して構想、制作、鑑賞の3つの段階に分けて考察した。

まず初めに「構想」では児童が何を作るか自分なりのイメージを持つための「想像力」や多くのイメージを持つための「感性」を育てられるようにするということを目標にした。与えられた題材に合わせて何を作りたいのか、どんな工夫ができるか頭の中での考えをまとめるためにワークシートを使用した。作りたいものを書き出したり、設計図を描いたりするなど児童の「構想」の手がかりとしてワークシートは活用される。

次に、「制作」では、「構想」の段階でイメージしたものを作品に表すことができるようにするという「創造力」を育てることを目標とした。児童がイメージしたものを表すことができるよう、作例を見て学ぶという手立てを講じた。作品を形作っている要素から、児童が想像にヒントを得ることを期待する。

最後に「鑑賞」では、自分や友達の作品の工夫を伝えあうことで、色使いや形を表現する力を高めることを目標とした。鑑賞で「想像力」を働かせるためには友達の作品や自分の作品に使われている良さ(工夫)を感じ取る力が必要になる。そこで、友達の作品の良さをインプットしたり、自分の作品の良さをアウトプットしたりすることで想像力に広がりを持たせることができるような手立てを講じた。

各段階における感性、想像力、創造力の定義

- 1 構想：自分の作りたいものをイメージする力
- 2 制作：作りたいものの具体化する力
- 3 鑑賞：友達の作品や自分の作品に使われている良さを感じ取る力

III 連携協力校の児童の実態

1 2年生の児童の実態

2年A組の児童たちの前年度までの活動を見ると表現力が高く、個性あふれる作品が多くあった。例えば、前年度の展覧会の「ごちそう、パーティー」では、デザインに工夫を凝らしたメニュー表をつかったり、作品がよりおいしそうに見える器を考えたりと児童の独自の発想のよさを感じることができた。ただ一方で、机間指導をしているとよい発想を持っている児童でも描きだすのに時間がかかったり、自分の表現を表すのに躊躇したりする姿も見られた。内なる感性を形としてあらわすことは困難さを伴う。そこで私は、具体物やワークシートの活用を通して、色や形に対して想像力を働かせることのできる児童を育む研究をした。

2 目指す児童像

以上のことから本研究で目指す児童の姿を以下の通りとする。

- ・独創的なアイデアを思い浮かべることができる児童。
- ・アイデアを形に表し、意図をもって制作することができる児童。
- ・色の使い方に意図をもって工夫できる児童。

IV 研究仮説

1 研究の手立て

本研究を行うにあたり、6つの手立てを用いて実践を行った。

手立て1：ワークシートに設計図を書き込む

手立て2：造形的な視点要素を知る

手立て3：作例を使った工夫

手立て4：児童一人一人にアドバイスを書く

手立て5：鑑賞での話し合い活動

手立て6：児童を引き付けるための板書

手立て1：ワークシートに設計図を書き込む

教師力向上実習Ⅰでは作りたいものを文字でたくさん書きだすことで、制作時に描くものをたくさん思い浮かぶことができるようにすることを目的にした。教師力向上実習Ⅱでは文字だけでなく、作りたいものを設計図として絵で表すことができるようにした。制作の方向性を決めるために行った手立てである。

手立て2：造形的な視点要素を知る

ここでは作品を形作っている要素を見せることで様々な制作パターンがわかるようにした。例えば、教師力向上実習Ⅰでは、卵を貼る向きを工夫できるよう何も書かれていない卵と色画用紙を用意し、児童の前で貼り方を何パターンか見せることで多様な貼り方が生まれるよう手立てを講じた。また、教師力向上実習Ⅱでは、ストローの仕組みを4パターン、グループごとに配り、それを動かしながら作りたいものを考えることができるように指導した。

手立て3：作例を使った工夫

この手立ては教師力向上実習Ⅱでのみ行った。作例は、作品が完成に近づき始めた第3時の始めに見せ、今より繊細に色や模様をつける方法や仕組みを複数合わせて使う方法を考えやすいようにした。

手立て4：児童一人一人にアドバイスを書く

この手立ては教師力向上実習Ⅱでのみ行った。一人一人に対して付箋にアドバイスを書き、それをもとに作品の制作を行うことができるようにした。アドバイスには色や形のことなど授業の目当てに即したことを中心に記述した。

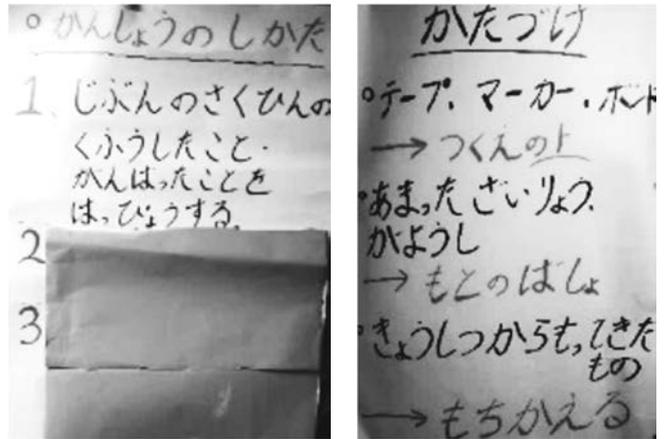
手立て5：鑑賞での話し合い活動

鑑賞では友達との話し合いを通じて、友達の作品の良さを感じ取れるよう指導した。教師力向上実習Ⅰでは、グループごとに友達の良かった点を大きな付箋に書くということを行った。また、教師力向上実習Ⅱではより多くの児童から付箋を得ることができるように、小さな付箋に友達の良いところを自由に書き込むことができるようにした。

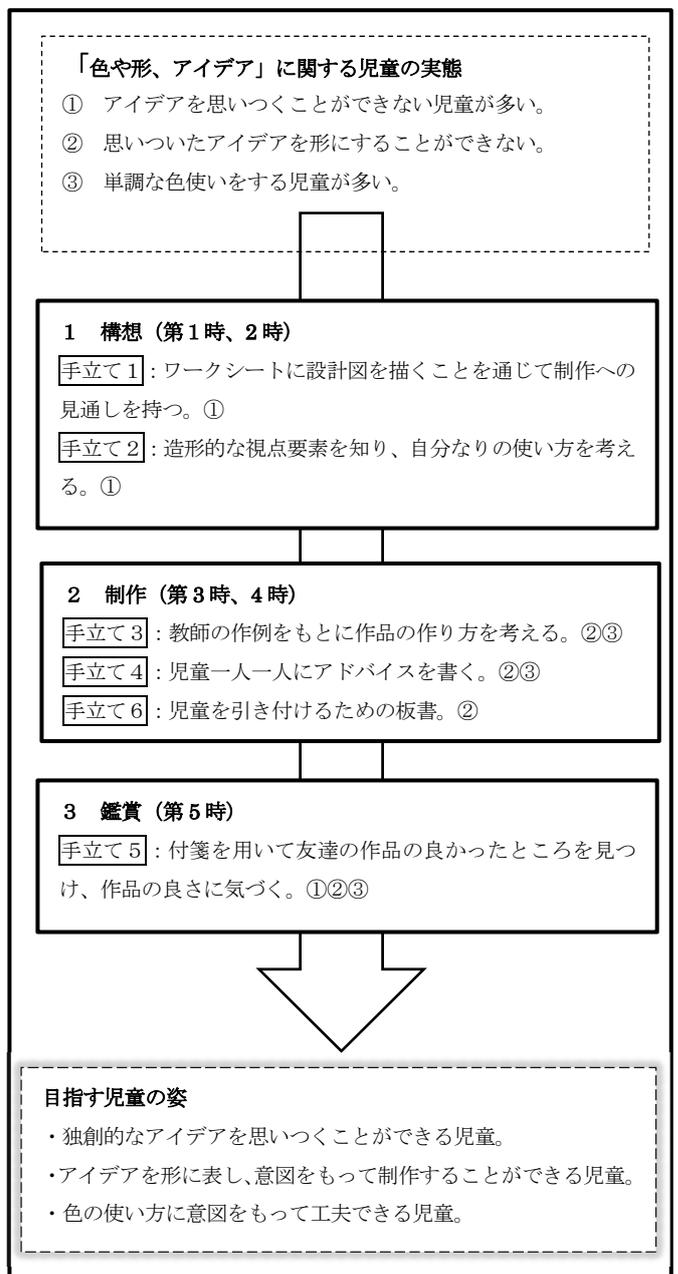
手立て6：児童を引き付けるための板書

この手立ては主に制作の段階で行った。板書では児童に伝えたいところを紙で隠し期待感を高めた。めあ

て、ポイントの紙を毎時間同じ色に統一するなど見やすい板書を心掛けた。



2 研究構想図（教師力向上実習Ⅱ）



5 実践の概要—構想について— (第1時)

(1) 実践の内容

5月7日【第1/6時】

授業の目標：活動の見通しをもち、授業に取り組むことができる。

第1時では、卵から出てくると面白いと思ったものを考えてワークシートに書き出すことでテーマを決め、テーマに即して色画用紙を選ぶことを行った。自分の好きなものや好きな場所、好きな食べ物をもとにたくさんのキーワードを書き出す姿が見られた。

(2) 実践の成果

児童はたくさんのキーワードを書き出すことができていた。そのため、制作の段階でそれを生かし、作品に多くのもを描くことができていたように思える。今回の授業は卵から生まれてきたものを一つだけ描くのではなく、たくさんのもを、想像力を働かせながら作るが必要な作品である。キーワードを書き出すことで制作を行うときに児童がワークシートに書いたことを振り返りながら活動する姿も見られた。

(3) 考察と今後の課題

キーワードを文字で書きだすという形式にしたため活動が単調になり、面白みに欠けるものになってしまったという課題が見つかった。絵でも描くことができるようにワークシートの使い方をもっと自由にする方法があっても良かったと思った。

6 実践の概要—制作について— (第2、3、4、5時)

(1) 実践の内容

5月7日【第2/6時】

授業の目標：卵の色や模様、大きさを考えながら、楽しく制作することができる。

5月13日【第3/6時】

授業の目標：卵の割り方、配置を考えることで面白い構図を見つけることができる。

5月13日【第4/6時】

授業の目標：卵から生まれるものを楽しく制作することができる。

5月21日【第5/6時】

授業の目標：卵から生まれるものを工夫して制作することができる。

2時間目には卵の形を切り取り、卵の模様を描く時間とした。卵から出てくるものと関連した模様を描くとよいと伝えることで、児童はヒントを得て自由な発想で作品を作ることができていた。

3時間目は卵に模様を描くことの続きを行い、卵を貼る台紙の色を選んでから、卵の割り方、卵の配置を考える時間とした。この時間では「造形的な視点要素」を知ることを大切にしたいものに

合わせてバリエーションにとんだ工夫ができるよう指導した。

4、5時間目は卵から生まれてきたものを色画用紙に描く時間とした。色数を増やしてみることや、余白を少なくしダイナミックに絵を描くことを中心に机間指導でアドバイスした。

(2) 実践の成果

造形的な視点についてのアドバイスをを行うことで児童の作品はとてもバリエーションにとんだ独創的なものになったと感じる。例えば、卵の割り方に関してはジグザクに切る、波のような形に切るなど児童が意図をもって切ることができていた。



【割り方の工夫1：割り方を波のようにする】



【割り方の工夫2：ジグザクを小さくする】

また、卵の配置に関して、卵を色画用紙からはみ出して貼ってみる、スライドさせたように張ってみるなど教師が例で見たことをもとにしたり、自分で新しい貼り方を考えたりと想像力を働かせて制作する姿を見ることができた。



【卵の配置の工夫1：卵をはみ出して貼る】



【卵の配置の工夫2：卵をスライドさせる】

(3) 考察と今後の課題

造形的な視点要素に関して児童は、多くの考えや自分の意図をもって制作に取り組むことができていた。しかし、造形的な視点要素を考える時間を多くとりすぎたため、卵から生まれてきたものを書き込む時間が少なくなり、作品を完成させることができない児童が何人か出てきてしまった。限られた時間の中で授業を構成しなければならないため、活動内容をより精選していくことの必要性を感じた。

7 実践の概要—鑑賞について— (第6時)

(1) 実践の内容

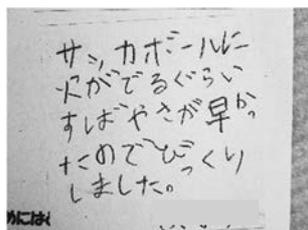
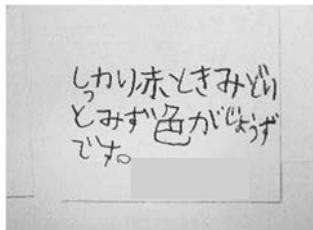
5月21日【第6/6時】

授業の目標：自分や友達の作品のよいところや工夫したところを見つけることができる。

第6時にはワークシートを使いながら鑑賞の活動を行った。はじめに、自分の作品の工夫したところ、頑張ったところをワークシートに書き、次にグループごとに友達とそれぞれ作品の良かったところについて発表しあった。感想を付箋に貼って相手に手渡すというを行った。最後に友達からの意見を受け、これからの作品作りをより発展させるためさらなる工夫について考えた。

(2) 実践の成果

すべての児童がグループ内の友達の作品の良かったところを見つけて書くことができており、活発な話し合い活動を行うことができていたと感じた。また、始めに作品の工夫したところや頑張ったことを聞くことができたので、書くことが苦手な児童もそれをもとによかったところを記述することができていた。色や形について具体的な内容を書くことができていた。



(3) 考察と今後の課題

グループでの話し合いを活発に行うことはできていたが、グループでの話し合いに活動をとどめてしまうと3人から4人程の意見しか聞くことができず、多くのアドバイスをもらうことはできない。より多くの児童が、かかわりあえる授業を考えることが大切だと感じた。

VI 教師力向上実習Ⅱにおける実践の報告

1 教師力向上実習Ⅱの実践

対象：愛知県名古屋市長A小学校

学年：第2学年A組17名

(男子11人・女子6人)

単元：図画工作科「ストローでこんにちは」

2 単元計画

時数	学習内容	手立て
1	ワークシートに設計図を書き、ストローで動く仕組みを作る。	①②
2	前時に作った仕組みをもとに大まかな形を作る。	②④⑥
3	作例を見て仕組みの使い方や色使いをさらに工夫する。	③④⑥
4	作品の仕上げをしたり、作品を複数つくったりする。	③⑥
5	作品の鑑賞。	⑤

3 実践の方法・内容

本実践では、目指す児童像に掲げている「独創的なアイデアを思い浮かべることができる児童」「アイデアを形に表し、意図をもって制作することができる児童」「色の使い方に意図をもって工夫できる児童」を目標に実践を行った。

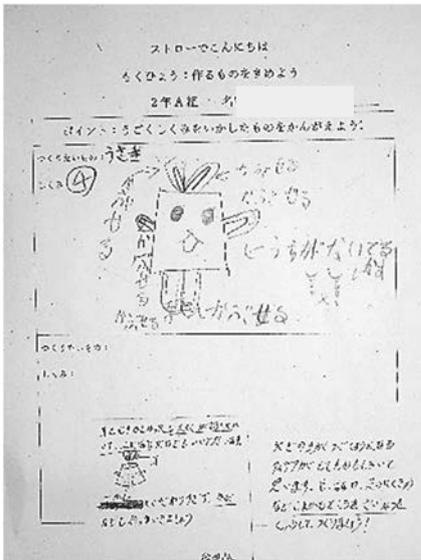
例えば、「独創的なアイデアを思い浮かべることができる児童」に関しては、構想の段階でワークシートに絵を書き込んだり、仕組みを触りながらアイデアを考えたりして想像力を働かせながらアイデアを考えることを目標とした。

「アイデアを形に表し、意図をもって制作することができる児童」に関しては、仕組みの動きの面白さを生かした作品を作ること、仕組みを複数組み合わせることで作品を作ることなどを目標とした。また、「色の使い方に意図をもって工夫できる児童」に関しては、色の組み合わせ方や形を成す材料の使い方の工夫ができるようになることを目指した。

4 手立てについて

手立て1：ワークシートに設計図を書き込む

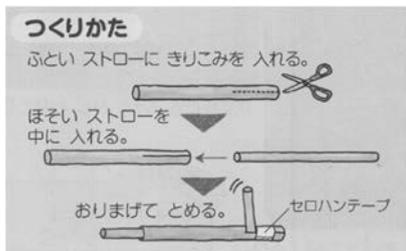
ワークシートに自分が作りたいものの設計図を描くことで、作品へのイメージが持てるように指導した。これにより、児童にとってどの部分が動くようになるのかわかりやすくなり、仕組みの活用がしやすくなる。



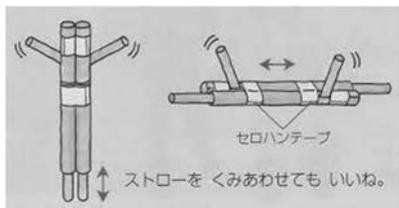
【資料：ワークシート（構想用）】

手立て2：造形的な視点要素を知る

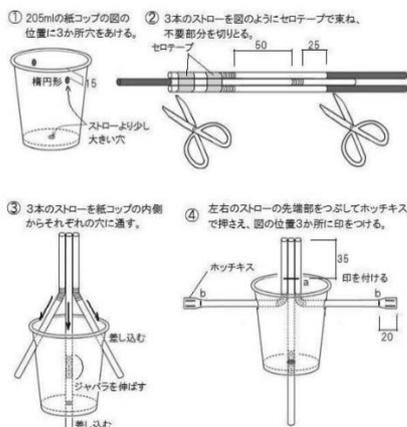
この時間にはグループごとに4種類の仕組みを配り、それを動かしながら作りたいものを考えることができるように指導した。実際に仕組みを触ることで、今後の活動や作品の完成図を思い浮かべやすくなる。



【仕組み①：写真上】



【仕組み②：写真左】 【仕組み③：写真右】



【仕組み④：写真上】

手立て3：作例を使った工夫

この時間では、前時に伝えた仕組みを使った作品に、さらに新たな要素を付け加え発展的な作品ができるように指導した。そのために、第3時で教師が作った作例を見せ、児童に色や形に関して新たな視点を与えることができるように指導した。これにより仕組みを複数使う方法や色や材料を増やすこと、作品をよりダイナミックに作ることを児童は知ることができていた。



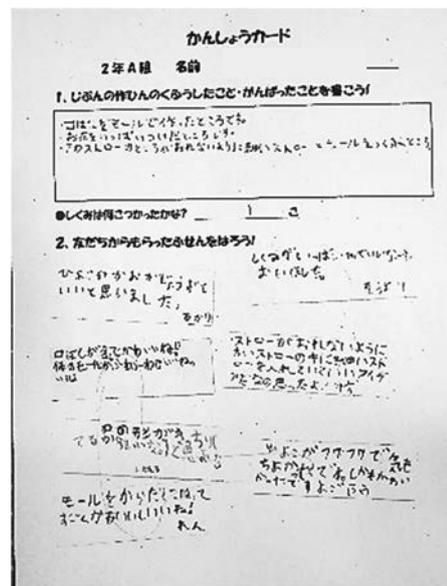
【ストローでこんにちは：作例】

手立て4：児童一人一人にアドバイスを書く

児童の作った作品に関して付箋にアドバイスを書き、ワークシートに貼って返すという手立てを行った。アドバイスには前時に児童が悩んでいたことや本時の目標にかかわることを書いた。

手立て5：鑑賞での話し合い活動

教師力向上実習Ⅰの鑑賞の反省を踏まえ、今回はクラス全体で話し合いが行えるようにした。グループだけでなくすべての児童の作品にコメントが書けるようにしたとともに、付箋を小さなものに変えてコメントを書くのにかかる時間が少なくなるようにした。



【資料：ワークシート（観賞用）】

5 実践の概要—構想について—（第1時）

（1）実践の内容

9月30日【第1/5時】

授業の目標：動く仕組みをつくり、それを生かしたアイデアを考えることができる。

第1時では、ワークシートや教師がグループごとに配った4種類の仕組みをもとに、自分が作りたい作品について考えるという活動を行った。また、構想が早く終わった児童から仕組みの制作を始めた。児童はワークシートに設計図を書き込んだり、配られた仕組みを動かしたりしながら自分が作りたい作品に関して考える姿が見られた。

（2）実践の成果

児童は作品のどの部分がどのように動くのか、自分の作品をイメージ通りに動かすためにはどの仕組みを使うとよいのかについて想像力を働かせながら設計図を描いたり、仕組みを動かしたりしながら作りたいものを考えることができていた。制作の段階でも本時に考えたことを活かして制作を行うことができていた。

今回はワークシートの使い方を自由にしたため、ワークシートに細かく書き込む児童もいれば、あまりワークシートを活用せず仕組みを触ることを中心に行う児童もあり、自分に合った活動方法を選ぶことができた。

ワークシートに作りたいものを書き込んだ児童は制作で行き詰ったとき、ワークシートに立ち返って振り返る姿が見られた。例えば、ワークシートに書いてある別の案で使われている要素を組み合わせてみる、別の作品に作り替えるなどの姿が見られた。このように形や色などの要素と深くかかわりながら新しい発想を生み出すことで児童は想像力を働かせて活動することができていた。

（3）考察と今後の課題

準備段階でも児童が色や形にかかわることができるような授業づくりをすることができるとより作品に対するイメージを持つことができる授業になったのではないかと感じた。今回の授業では、ワークシートにアイデアをイラストで描くことで形に対するイメージを膨らませながら制作する姿が多く見ることができた。一方で色に関しては始めのうち一色の色画用紙のみで制作を行い、短時間で完成させてしまう、材料を多く使わずに作品を作るなど単調な作品を作る児童が多かった。ワークシートに描いたイラストに色鉛筆などで色を付けても良いようにするなど工夫すると児童は始めから色に対する工夫ができたのではないかと感じた。

6 実践の概要—制作について—（第2、3、4時）

（1）実践の内容

10月1日【第2/5時】

授業の目標：動く仕組みを活かし、自分なりのアイデアを考えながら制作することができる。

10月8日【第3/5時】【第4/5時】

授業の目標：動く仕組みを工夫し、一つの作品を作りこむことができる。

第2時では、仕組みの制作の続きを行い、仕組みができた児童から形や色にかかわる作品作りに入るところまでを行った。授業の始めにアドバイスを書いた付箋を貼ったワークシートを読むことで、児童がそれを参考にしながら制作を進めることができるようにした。

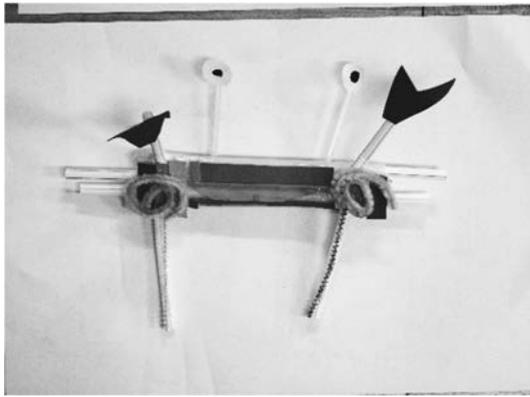
第3時、4時では作品作りの続きを行った。第3時には導入に作例を見せた。作例には児童が使っていない工夫を多く織り込み、色や形に対して新しい視点を持つことができるようにした。これにより児童は、作例に使われている要素をヒントにしながら独創的な作品を作ることができていた。

（2）実践の成果

児童は教師の作例を参考に、自分なりにアイデアを生み出すことができていた。例えば、形に関しての工夫では前時まで一つの仕組みで作品を作っていた児童が、動物の尻尾と腕が2か所動くような仕組みを二つ使った作品を作りあげた。（作品1）また、別の児童は、カニの足、目、はさみの3か所が動くようにしたい（作品2）という発想を持ち、その実現のために仕組みを複数使い、想像力を膨らましながら活動する姿を見ることができた。



【ストローでこんにちは：作品1】



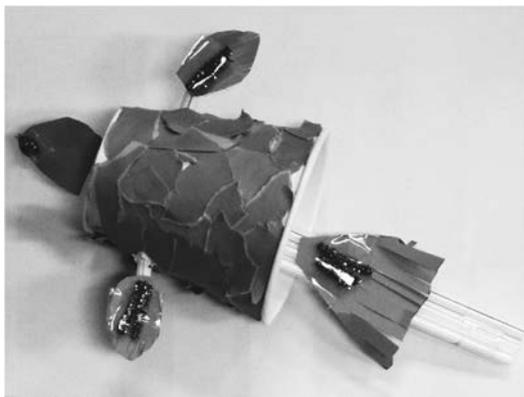
【ストローでこんにちは：作品2】

また、仕組みの動かし方にも自分ならではの工夫を凝らしている児童が多くあらわれた。例えば、作例3を作った児童は鳥の羽が「いないいないばあ」をするような動きにすることで、より表現力のある作品作りにつながった



【ストローでこんにちは：作品3】

色、材料に関する工夫を行っている児童も多くいた。例えば、作品4を作った児童は、魚に鱗のような形を貼ってみたいというアドバイスをうけ、色画用紙を手でちぎり貼ることで躍動感のある魚を作ることができていた。また、この作品は目にジュズダマを使用しており、異なる素材を組みあわすという工夫にも挑んでいる。



【ストローでこんにちは：作品4】

下の作品は児童が想像力を働かせながら制作した作品である。はじめこの児童は作品を作ったとき、何を

工夫してよいかわからない様子だったが、「どんなワニにしたいか」などテーマを設定しながら作るよう促すと、「女の子のワニにしたい。」という思いを児童が持つことができ、花のボタンをつける、モールでカラフルな服を作るなど多くの材料を工夫しながら制作することができた。



【ストローでこんにちは：作品5】

ここで取り上げることができなかった作品の多くからも、それぞれの創造力を働かせた独創的な作品制作ができていたと感じた。

(3) 考察と今後の課題

この授業では、仕組みを生かした作品作りができるという下位目標を立てており、これは児童全員が行うことができていたと感じた。一方で、仕組みを複数使うことができるという上位目標を達成できた児童の数は17人中7人とどまってしまった。仕組みを複数使った作例を多く提示することにより、もっと多くの児童が複数の仕組みにチャレンジできたのではないかと感じた。

7 実践の概要—鑑賞について— (第5時)

(1) 実践の内容

10月15日【5/5時】

授業の目標：作品で遊びながら、動きの面白さや作品の工夫を感じている。

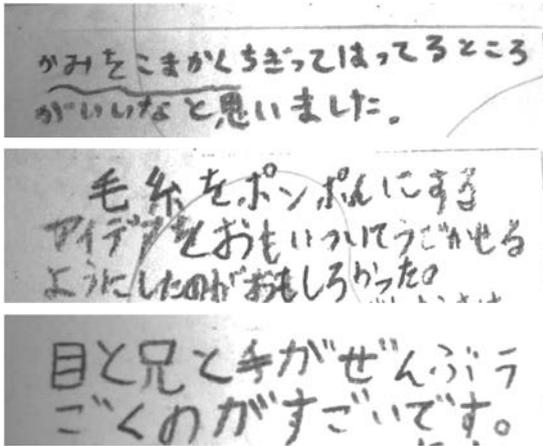
第5時には、ワークシートを使いながらの鑑賞活動を行った。鑑賞の仕方は「ひみつのたまご」と同時に、自分の作品の工夫したところ、頑張ったところをワークシートに書き、次にグループごとに作品の良かったところについて発表しあい、それを付箋に貼って相手に手渡すという手順で行った。前回から変更した所は付箋の大きさを小さなものにする事で短い時間で多くの友達にコメントを書けるようにしたこと、また、グループの中だけでなく、自由に自分の好きな作品にコメントできるようにしたことである。

(3) 実践の成果

児童の中からは楽しかった、もっとやりたいといった声を聞くことができた。このことから、児童は作品制作を楽しみながら授業に取り組めたのではないかと

と感じた。また、ねらい通り多くの児童と交流しながら、友達の作品のよさを見つけたことができたことも成果だと思う。

今回の授業では、赤色と黄色の付箋を配り、赤色の付箋には色と材料について記述する、黄色の付箋には形や動きの面白さについて記述するというようにした。これにより児童は何を書くか視点が明確になったと感じる。児童のコメントの中には、「かみをこまかくちぎってはるところがいいと思いました。」というように材料に関する記述、「毛玉をぽんぽんにするアイデアをおもいついてうごかせるようにしたのがおもしろかったです。」というアイデアに関する記述、「目と足と手がぜんぶうごくのがすごいです。」という仕組みの使い方に関する記述など構想や制作の過程で教師が伝えたことを児童はよく振り返ることができていた。



(4) 考察と今後の課題

後半はグループごとでの活動をやめたため、児童の動きが自由になりすぎてしまい、指示や説明が浸透しにくくなってしまった。また、付箋をもらえる数に児童の間で隔たりが出てしまうなどの課題が生まれた。改善案として自分の作品を説明する児童とそれを鑑賞する児童の2つのグループに分けることで活動の役割を明確にしたり、自分が作品の中で工夫したことを一人ずつ発表してから鑑賞の活動に入ったりすることで、クラス全員の作品が目にとまり、付箋の数の隔たりを少なくできるのではないかと考えた。

児童が書いた内容を見ると、色に関してのコメントを書くことができる児童が多くいたが、形や動きに関する記述が少なかった。仕組みを使っている数、動きの面白さや児童が作品に込めた思いなど授業の導入のときに作品を鑑賞する視点をわかりやすく伝える必要があった。

VII 研究の考察とまとめ

1 研究の成果と課題

本研究では6つの手立てを用いて色や形に対して児童が感性、想像力を働かせるための研究を行った。

構想の段階では感性や想像力を働かせながらワーク

シートに豊富なアイデアを書きこみ、書かれた計画をもとに構想を膨らましていく児童の様子を多く見ることができた。このことから、児童は感性や想像力を働かせながらイメージを膨らませる力を身につけることができたのではないかと感じる。

制作では、作例に使われている要素をもとに自分の作品を発展させていく姿や、造形的な視点要素を理解し、形や色に自分なりの独創的な工夫をする姿が随所に見られた。このことから、構想でイメージしたことを実際に形に表す「創造」する力を伸ばすことができたと感じる。

鑑賞では、記入した感想からも「かみをこまかくちぎってはるところがいいとおもいました」や「色がカラフルですてきだね」など色や形に関する友達の良いところをたくさん見つけることができていた。このことから構想や制作で行った自分の工夫を振り返り、自分の中で消化するとともに、他者の作品の良いところを見つけ、自分の中に取り入れていく力も身につけることができたのではないかと感じた。

児童はそれぞれ構想、制作、鑑賞の段階で色や形に対して感性、想像力を働かせ、その力を伸ばすことができていた。

VIII 今後のさらなる発展について

図画工作の授業を実践する際、教師が想定したことを児童が超え、独創的なアイデアを生み出すことがよくある。そうしたときにそれを誉め、教室でその児童のアイデアのよさを伝えていける教員になりたいと感じた。

今回の実践では成果も多くあったが、それぞれに課題も多く残された。それらを改善してより良い授業づくりができるようこれからも研究し続けていきたい。

【引用・参考文献】

- (1) 文部科学省「小学校学習指導要領解説 図画工作編 第1節図画工作科の目標 1教科の目標」2019年、15ページ
- (2) 阿部宏行「学習指導要領(図画工作)と想像力」『北海道教育大学紀要. 教育科学編』69、2018年、314ページ
- (3) 色部和子「想像力と創造力」を豊かにする図画工作の授業についての考察：絵本制作を通して」『千葉敬愛短期大学紀要』40、2018年、30ページ
- (4) 岩倉史佳「図画工作科における表現力育成を意識した単元開発・実践とその評価 一興味・関心を引き出す場入の工夫を湿して」『教育実践高度化専攻成果報告書抄録集』9、2019年、2ページ
- (5) 佐藤昌弘「図画工作科の研究(各教科等の研究)創造的な知性を培う」『創造的な知性を培う』2、2005年、73ページ
- (6) 文部科学省「中学校学習指導要領解説 美術編 第2節美術科の内容 2各領域および{共通事項}の内容」2019年、28ページ
- (7) 内田裕子「造形教育と感性—「学習指導要領」の「感性の捉え方」—」『大分大学教育福祉学部研究紀要』31(2)、2009年149-164ページ